Contes Fantastiques Français du 19e Siècle:
Jean Lorrain et d'autres.

東方の旅

G・ド・ネルヴァル

下

篠田知和基 訳

紀田順一郎

荒俣宏

責任編集

世界幻想文学大系……責任編集＝紀田順一郎＋荒俣宏
第三十一巻B

東方の旅――下

昭和五九年二月二五日印刷　昭和五九年二月二九日初版第一刷発行
著者――G・ド・ネルヴァル
訳者――篠田知和基
発行者――佐藤今朝夫
発行所――株式会社国書刊行会
東京都豊島区巣鴨三―五―一八　郵便番号一七〇　電話〇三―九一七―八二八七　振替東京五―六五二〇九
造本者――杉浦康平＋鈴木一誌　協力＝佐藤篤司
挿画――渡辺富士雄
印刷所――凸版印刷株式会社＋セイユウ写真印刷株式会社
製本所――凸版印刷株式会社
定価――三、二〇〇円
●―落丁本・乱丁本はおとりかえします

篠田知和基しのだちわき
一九四三年、東京都生れ。
東京教育大学卒業。
現在、名古屋大学助教授。
専攻、仏文学・比較文学。
主要著訳書――
『幻影の城』思潮社、一九七二年。
『ネルヴァルの生涯と作品』牧神社、一九七七年。
『城と眩暈』(共著)国書刊行会、一九八二年。
ジャン・レー『マルベルチュイ』月刊ペン社、一九七九年。
ジャン・ロラン『フォカス氏』月刊ペン社、一九八一年。
オクターヴ・ミルボー『責苦の庭』国書刊行会、近刊。

世界幻想文学大系——第三十一巻B

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

東方の旅——下

G・ド・ネルヴァル——篠田知和基＝訳

目次

9——東方の旅——下
11——ドルーズ族とマロ族
12——第一部—レバノン山の王侯
12——Ⅰ—山岳地帯
18——Ⅱ—混成部落
23——Ⅲ—城館
27——Ⅳ—狩り
31——Ⅴ—ケスルーアン
34——Ⅵ—戦闘
42——第二部—囚われ人
42——Ⅰ—朝と夕暮
48——Ⅱ—フランス人学校訪問
52——Ⅲ—アッカレ

61 ―― Ⅳ―ドルーズのシャイフ
72 ―― 第三部―カリフ・ハーキムの物語
72 ―― Ⅰ―ハシッシュ
81 ―― Ⅱ―飢饉
86 ―― Ⅲ―王宮の貴女
92 ―― Ⅳ―モリスタン牢
100 ―― Ⅴ―カイロの大火
107 ―― Ⅵ―二人のカリフ
116 ―― Ⅶ―出発
120 ―― 第四部―アッカルーアンチ＝レバノン
120 ―― Ⅰ―客船
125 ―― Ⅱ―ギリシャ人司祭夫妻
133 ―― Ⅲ―アッカの昼食
139 ―― Ⅳ―マルセイユ人の冒険
146 ―― Ⅴ―パシャの晩餐
149 ―― Ⅵ―手紙（断片）
166 ―― 第五部―エピローグ
166 ―― Ⅰ
167 ―― Ⅱ
170 ―― Ⅲ

173 ――ラマダンの夜
174 ――第一部―スタンブールとペラ
174 ――Ⅰ―バリク＝バザール
178 ――Ⅱ―スルタン
183 ――Ⅲ―死者たちの大苑
189 ――Ⅳ―サン＝ディミトリ村
197 ――Ⅴ―故宮の冒険
202 ――Ⅵ―ギリシャ人村
206 ――Ⅶ―四人の美女
212 ――第二部―芝居と祭り
212 ――Ⅰ―イルディス＝ハーン
215 ――Ⅱ―ペラ見物
220 ――Ⅲ―カラグーズ
235 ――Ⅳ―水鑑定人
242 ――Ⅴ―スクタリのバシャ
246 ――Ⅵ―デルヴィシ
254 ――第三部―講釈師
254 ――カフェの講釈
256 ――朝の女王と精霊の王ソリマンの物語

256 ―― Ⅰ―アドニラム
263 ―― Ⅱ―バルキス
278 ―― Ⅲ―神殿
294 ―― Ⅳ―メロ
306 ―― Ⅴ―青銅の海
313 ―― Ⅵ―幻
322 ―― Ⅶ―地下世界
334 ―― Ⅷ―シロアの洗い場
349 ―― Ⅸ―三人の職人
358 ―― Ⅹ―会見
366 ―― Ⅺ―王の夜宴
377 ―― Ⅻ―マクベナク
392 ―― 第四部―バイラム
392 ―― Ⅰ―アジアの水郷
400 ―― Ⅱ―大祭の前夜
404 ―― Ⅲ―後宮の祭り
407 ―― Ⅳ―アトメイダン
415 ―― あとがき……篠田知和基

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

東方の旅——下

ドルーズ族とマロ族

第一部——レバノン山の王侯

I——山岳地帯

レバノン山の総督ないしは王侯が私のところへやってきて、ケスルーアンにあるアントゥーラからほど遠くない彼の住まいに何日か遊びに来るようにと言ってくれたとき、私はその招待に大喜びで応じた。翌朝には出発しなければならなかったのでバチスタのホテルへ戻って、約束の馬の借り賃について話しあう時間しかなかった。

厩舎に案内されてみると、そこにいたのは、足がごつく、背骨ときたら魚の骨みたいに尖った骨ばった馬ばかりだ……。どうみても〈ネジ〉(中央アラビアの名馬の産地)の馬種に属しているようには見えない。しかしこれが、峻しい山道を登るには最良で、一番確実だという。優雅なアラブの競走馬は、砂漠の砂の〈競馬場〉でしか特徴を発揮しないのだ。私はそのうちの一頭を、行きあたりばったりに選んだ。明朝、日の出とともに戸口まで連れてきてくれるという約束で、さらに案内役として、イタリア語をきわめて流暢に話すムーサ(モーセ)という名の少年が紹介された。

夜になった。シリアの夜は蒼ざめた昼でしかない。みんなテラスに出て涼をとる。この町の眺めは、周囲の

丘を登るにつれてバビロニア的な様相を呈してくる。昼間は高くそびえて蒼然と見えた家並みも、月光のもとで遠くから見ると、階段状の白いシルエットをくっきりと浮かびあがらせ、その整然たる形には、ところどころ糸杉や櫟の梢が変化を与えている。

町をはずれると、はじめのうちは、アロエとか棒サボテンとかうちわサボテンといった不恰好な植物ばかり、それがインドの神々のように赤い花をつけた無数の頭をふりたて、足もとに、なかなか、あなどりがたい槍や剣を突きたてる。しかしその垣を越えると、先はまた白い桑や月桂樹やレモンの木が金属質の色の葉をきらきらと光らせるまばらな茂みになる。夜光性の羽虫がここかしこに飛び交い、木の下蔭に賑わいを与える。遠くにあかあかと火のともる高い建物に、尖頭アーチや拱門の形が浮かびあがる。そんないかめしい佇まいの館から、時に美しい歌声にあわせたギターの音が聞こえる。

私の住まいへ登ってゆく小径の曲がり角に、巨大な木の洞に造られた居酒屋がある。そこに近在の若者たちが集まってきて、夜ごと二時頃まで飲みかつ歌う。彼らの喉音のアクセント、引きずるような鼻声の朗吟が、近くで聞いているヨーロッパ人の迷惑などおかまいなしに、毎晩繰り返される。それでも私は、原初的にして聖書的なその音楽にも、音階発声の偏見にとらわれないかぎり、時として魅力がないわけではないと思う。

家に帰ると、家主のマロ人とその一族全員が、私の部屋に隣接するテラスに出て待っていた。これら善良な人たちは、親類縁者うち揃って訪問をすることが敬意を表することだと思っている。コーヒーを出し、パイプを配る手間は、家主の妻と娘たちが引き受けてくれたが、費用は当然こちら持ちである。会話は、イタリア語とギリシャ語とアラブ語のちゃんぽんで、ぎくしゃくとしか進まない。昼間眠らなかったし、明日は明

日で日の出とともに発たなければならないので、できればベッドにもぐりこみたくてうずうずしていたが、それを口にだして言うわけにもいかない。とはいえ穏やかな夜で、空には星がちりばめられ、足もとにはところどころ星あかりで白く光る、暗い海の青が微妙な変化を見せている。それらを見ていると、応対の退屈さもかなりまぎらわすことができた。やがて、これら善良な人たちも暇を告げていった。なにしろ明日は、彼らが目を覚ます前に出発するのだ。そして実際、鶏の声に邪魔されながら、それでも三時間は寝たろうか。目を覚ますと、若いムーサが戸口のテラスのへりに坐っている。彼が引いてきた馬は石段の下に立っている。片足を紐でくくって腹に引きあげてある。アラブ人は、こうやって馬を固定しておく。私としてはトルコ式の高鞍に腰をすえるだけでいい。この鞍ときたら万力のように締めつけるやつで、落馬などしようたってできない。ストーブのシャベル型をした大きな革の鐙は、かなり高い位置につけられているので、足をふたつ折りにしていなければならない。鐙の角のとがったところで、馬に拍車をかけるようになっている。宮様は、私がアラブ式騎手の姿勢をとるのに四苦八苦しているのを見て苦笑いしながら、二、三の忠告をしてくれた。彼は明朗な、にこやかな青年で、まずはその人づきあいのよさに魅了されてしまった。名前をアブ＝ミランといい、ケスルーアンではもっとも名高いホベイシュ家の分家の分家に属していた。かといってそれほど裕福なわけではなく、一管区を構成する十ばかりの村を統治して、その分の年貢をトリポリのパシャに納めている。

みんなの用意がととのったところで、海岸沿いの街道まで下りていった。道といっても、オリエント以外ではただの窪道とみなされてしかるべきしろものだ。一里（リュウ）ほど行ったところで、あの有名な竜が出てきたという洞窟を教えられた。ベイルートの王の娘を呑みこもうとしているところを、聖ゲオルギスに槍で刺し殺さ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.